

教員養成における「健康」をエントリーポイントとした ESD 推進のための授業の開発

～「感染症と差別・偏見」の視点から～

上野真理恵（信州大学）、友川幸（信州大学）、佐々木緩乃（琉球大学）、杉田映理（大阪大学）

キーワード: ESD, SDGs, 教員養成, 感染症, 差別・偏見

1. 背景

持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）は、小学校から大学に至る全ての教育段階において推進されており、新学習指導要領や第3期教育振興基本計画にも ESD の目的である「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられている。学校現場で ESD を推進していくためには、現職教員の指導能力の向上に加えて、教員養成の学生の指導力の育成が求められる。

これまでの研究では、教員養成の学生が ESD を学習することの重要性（渡邊 2017）や、ESD 学習が、学習指導案の作成と改善に有効であること（伊藤 2014）が報告されているが、その研究の蓄積は十分ではない。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の蔓延は、持続可能な社会の実現を脅かす脅威となっており、感染症に起因する差別や偏見等の課題も生じている。しかしながら、これらの課題について、課題解決を目指し ESD を推進していくための授業の開発に関する研究は十分に行われていない。

2. 目的

本研究は、教員養成系大学の学生を対象に、ESD の 1 対象分野である「健康」をエントリーポイントとした授業開発することを目的とした。開発にあたり、新型コロナウイルス感染症に起因する差別・偏見の問題を教材にするために、対象学生の当該問題に関する認識や、それらを指導する自信等の実態を明らかにし、得られた結果を基に、ESD の観点を取り入れた「感染症と差別・偏見」の授業を提案した。

3. 方法

地方国立大学の教育学部で保健体育教員免許の取得を目指す 1 年生 (21 名) を対象に、オンライン (Google Form) による質問紙調査を実施した。質問紙では、新型コロナウイルス感染症に関連して、a) 差別・偏見を見聞きした経験・内容、b) 差別・偏見の原因と差別・偏見の防止に必要なこと、c) 差別・偏見の問題に対する指導の必要性と指導の自信について、4 件法または自由記述で回答を得た。自由記述のデータは、回答内容の意味ごとに分類し、カテゴリーを生成した。

授業の開発においては、国際保健、保健教育の専門家、現職の教員などによる検討会を複数回開催し、指導の内容や方法について検討した。

4. 結果・考察

1) 対象

分析は、回答に不備のなかった 18 名を対象とした。

2) 差別・偏見を見聞きした経験・内容

差別・偏見を見聞きしたことがある者は 58.8%であっ

た。見聞きした内容としては、「感染者にコロナウイルス

に関連したあだ名をつける」や、「医療従事者の家族の登校を拒否する」等が挙げられた。

3) 差別・偏見の原因、差別・偏見の防止に必要なこと
差別・偏見が起きる原因として、「感染症への不安・恐怖 (38.9%)」、「感染症の知識不足 (22.2%)」等が挙げられた。また、差別・偏見の防止に必要なこととして、「感染症に対する知識を身につける (66.7%)」が最も多く挙げられ、次に「感染した人の気持ちを考える (22.2%)」が挙げられた。

4) 差別・偏見の問題に対する指導の必要性と指導の自信
差別・偏見の問題に対する指導の必要性については、94.5%が、「ややそう思う」または「とてもそう思う」と回答した。また、指導をすることへの自信については、72.2%が、「あまり自信がない」または「まったく自信がない」と回答した。

5) 開発した授業の内容

授業は、全 3 時間の構成とした。具体的には、第 1 時では、感染症の予防についての基礎的な知識を学ぶ内容とした。第 2 時では、コロナ禍での差別・偏見の事例を取り上げ、①事例の問題点や差別・偏見の原因について生徒が話し合う、②差別や偏見の過去の事例の話を書く、③差別・偏見を受ける立場に立った時の気持ちや、自分の身の回りで差別が起きたときの対応について話し合う内容とした。また、第 3 時では、差別・偏見をなくしていくために自分たちが具体的にできることを議論する内容とした。

全 3 時間の授業では、ユネスコが規定している「ESD の視点に立った学習指導で重視する 7 つの能力・態度」のうち、「多面的・総合的に考える力」、「コミュニケーションを行う力」、「つながりを尊重する態度」を重点的に育成できるように、グループ学習を導入し、生徒同士の話し合いの場を設けた。

5. 結論

本研究の結果、調査対象となった学生の半数以上が、実際にコロナ禍における差別・偏見を見聞きする体験を有していることが明らかになった。また、差別・偏見の原因として、感染症への不安や恐怖、知識不足があると認識していることが分かった。また、90%以上の学生が差別・偏見の問題に関する指導の必要性を感じているものの、70%以上が指導の自信がない傾向が明らかになった。

そのため、感染症の基礎的な知識を提供し、感染症と差別・偏見の問題にある心理的背景や問題解決のための具体的な取り組みを考えることできる授業を開発した。

今後の課題としては、開発した授業を用いた実証研究を通して、さらなる内容と指導法の改善を図るとともに、実践の効果を多角的に検証していく必要がある。